



特集「緑地と精神・健康」の編集にあたって

人類はあらゆる時代において、心身ともに健康で真に豊かな暮らしの実現を望んできた。しかしながら、社会経済システムや各種サービス、医療技術などが高度に発達した今日においても、その実現・継続は決して簡単なことではない。

ストレスや健康問題は、人間生活の根本的なクオリティー・オブ・ライフをむしろ脅かす。これらが生じる要因は多様かつ複雑である。しかし、もし自然の潤いや季節感が不足した人工的な生活空間とそこでの多忙な生活によって「生き物である生身の人間性」が無意識のうちに痛めつけられていることが理由の一つであるとすれば、その解決のためには、人と自然のふれあいを取りもどし、自然の恵みを享受する「人間と自然の関係の再構築」を図ることが必要であり、また効果的であると考えられる。

人間にとってもっとも身近な自然の一つが「緑（緑地）」である。ここで「緑」とは、森林、公園緑地、緑化空間、農地、里山、社寺林などのさまざまな植生・自然空間、またそれらと一体となった水辺空間や生態系などを総称的にさす。すなわち「緑」は、樹木・草本などの植物体のみならず、基盤となる土壌、循環する水、太陽光や空気、そこに生息する生物といったさまざまな生命・物質・エネルギーを内包し、人為による改変以前の本来の環境基盤である自然環境、あるいは庭園・里山のような人為と調和した自然的空間を、豊かな変化と多様性をもって体现する。

「緑」の効用は、CO₂の吸収・固定、大気浄化、騒音軽減、ヒートアイランド現象等の都市気候問題の緩和、水循環の健全化、生物多様性の保全、防災、レクリエーション、コミュニティの醸成など多岐にわたるが、このうちもっとも根幹的な効用の一つが、人間の生存基盤である身近な自然環境として、人間の精神や身体に与える影響であろうと考えられる。

今日、健康への関心が高まるなか、身近な自然環境である「緑」とのふれあいを、予防や治療にとりこむ動きがある。また、環境教育や環境配慮の普及啓発を図る立場からも、自然とのふれあい志向や健康志向をとりこもうとする動きがある。スローライフ、LOHAS等と評されるライフスタイルは、みずからの心身の健康づくりと環境問題への貢献を同時に満たす充足感のある生活として注目される。

「緑」は、自然物ならではの变化と多様性・複雑さをもつ。また、人間の精神や健康も「複雑系」の最たるものである。これらはともにその価値や状態を定量的に把握することがむずかしく、「緑」が人間の精神・健康に与える効果を解明し、適切なアプローチを実践することは、「複雑系」×「複雑系」の方程式をひもとく大きなチャレンジであるといえよう。

本特集では、本テーマに先進的に取り組む研究者の方がたにより、森林、公園緑地、緑化空間、農地等の「緑（緑地）」と人間の精神・健康を統合したアプローチの考え方、さまざまな実証実験のデータや実践事例等について、最新の知見を幅広くまとめた。

人間の健康や環境問題についてさらに根本的な解決を図るためには、環境と健康に対する統合的なアプローチに加えて、その土台となる社会・経済のあり方に対する考察も必要となろう。一例として、緑豊かで潤いある持続可能な環境共生型の国土・都市・地域の形成と、そのための行政・企業・市民等の行動など、「緑」はこの点でも重要なキーワードとなる。

この特集が、環境と健康に対する統合的な研究や施策、さらにはそれを支える社会・経済システムの構築にむけた取り組みを進めていくうえでの足がかりとなれば幸いである。

（編集委員 加藤順子）